

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

魏 晨

【所属】(助成決定時)

名古屋大学大学院文学研究科

【研究題目】

植民地満洲をめぐる児童文化——日滿綴方使節の活動とその周辺

【研究の目的】(400字程度)

植民地の児童文学研究には、三つの問題点がある。A. 台湾、朝鮮に関する研究の蓄積があるが、近代日本にとって不可欠な存在だった植民地満洲に関する研究が欠落している。B. これまでの研究は、児童文化研究＝児童文化の発信側、つまり活動家・作家・雑誌を研究対象とする考え方に囚われており、児童文化研究に児童が登場しない状態が長く続いている。C. 時間軸に従って史料をまとめることに主眼をおいた文化史・文学史的な研究が主である。大量の史料を収集・整理できたことは評価されるが、少国民としての児童と近代帝国日本との関係、児童文化に表れた植民地主義のあり方などの問いに対してじゅうぶんな解答が得られたとはいえない。

以上の問題点を解決するために、本研究は日滿綴方使節派遣を研究対象に、受信者（日滿綴方使節活動の主催側）と発信者（実際に綴方作品を書いた児童）との二つの側面から日滿綴方使節の実態を考察し、その歴史意義を探ることにより、植民地満洲をめぐる児童文化のあり方を解明し、近代帝国日本による植民地主義と児童文化の関係を明らかにすることを目的にしている。

【研究の内容・方法】(800字程度)

研究内容・方法は二つの部分に分けている。一つは資料収集である。もう一つは資料分析である。

1. 資料収集

日滿綴方使節に関する資料の一部は、日本国内では所蔵不明となっている。中国などにある資料も、かつては資料の整理不足や本格的な学術交流が少なかったことから、日本からアクセスできなかった。しかし近年、中国の図書館や資料館は、所蔵する日本語文献の目録を編纂し出版・公開するようになり、中国で所蔵されている資料にアプローチできるようになった。申請者は、研究の第一ステップとして日本国内だけではなく、中国（必要であれば韓国や台湾など）での資料調査・収集を行う。

2. 資料分析

研究目的を達成するため、二つの視点から分析を行う。

(1) 大人・上・国家視点⇒

満洲の教育制度（綴方の教育事情）や児童文化の状況を把握した上で、日滿綴方使節に参加した諸機関の力関係を考察し、満洲をめぐる児童文化のあり方、特に満洲国の特殊な政治体制及び文化政策が児童文化にどのように影響を及ぼしていたのかを明らかにする。具体的には、以下のとおりである。

(2) 児童・下・少国民視点⇒

主催側が児童に植え付けようとした帝国日本と植民地・満洲との関係に関する考え方があったのに対して、実際に児童がどのような関係についての見方を持つに至ったかを分析する。両者の「ズレ」と「一致」を資料から見出し、それに注目して、児童文化から見えてくる帝国日本と植民地・満洲との複雑な関係を解明する。

※分析内容(1)から近代帝国日本の植民地主義が児童文化に与えた影響を、分析内容(2)から児童文化

から見えてくる植民地主義のあり方を見出し、両者を統合して研究目的を達成する。

【結論・考察】（４００字程度）

申請者は 2013 年 4 月下旬から 5 月上旬まで、中国の東北部・華北部の図書館で資料調査を行った。中国で得た情報と日本ですでに確認できた情報を合わせて、以下のことが明らかにすることができた。

1. 日満綴方使節は、南満洲鉄道（満鉄）が主催し、『東日小学生新聞』『大毎小学生新聞』などのメディアの協力を得て 1939 年から終戦まで続けられたものである。日本と満洲国の両側で男子・女子学生が選ばれ、それぞれ満洲と日本を見物し、それについて綴った。現在、日満綴方使節は 1939 年 8 月、1940 年 8 月、1942 年 8 月合計三回派遣されたことが明らかになった。そして、第一回目と第三回目は日本から満洲へ、第二回目は満洲から日本への派遣だと確認できた。

2. 日本は満洲支配を正当化し、また長期化するために、児童の書いた綴方を利用し、植民地支配を宣伝した。また、綴方を書く児童は少国民、将来の支配者として、綴方使節の派遣を通して、支配の論理を頭に植え付けられた。

3. 日満綴方使節は児童文化、いわゆる児童文学、児童教育を植民地支配に巻き込まれた一つのシステムを示している。児童と植民地支配と結びつけるには、児童を動員するだけではない。児童・教育者・学校・メディア（新聞）・文学者・国策会社を結びつけさせ、連動させた上で、日満綴方使節が成立した。